



Title	二つの円環 : Hard Times の空間構造
Author(s)	新野, 緑
Citation	Osaka Literary Review. 1984, 23, p. 78-91
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25595">https://doi.org/10.18910/25595</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 二つの円環

### — *Hard Times* の空間構造 —

新 野 緑

#### I

架空の工業都市 Coketown を舞台とする *Hard Times* (1854) は、その小説空間にひとつの特徴がある。London を中心に展開するのを常とする Dickens の諸作のうち、前作 *Bleak House* (1852-53) において、London に対立する理想の世界として示唆されるにとどまった北部工業都市が<sup>1)</sup> Coketown の名で実現し、物語がこの町で終始するからである。Dickens の小説中、特異とされるこの作品は、何よりもまず London を離れた架空の空間構造に、小説を解く鍵が隠されているように思われる。

*Hard Times* は、“Sowing,” “Reaping,” “Garnering” と題される三部から成る。ここに示された穀物栽培の比喻は、この小説が主人公 Louisa の cultivation, すなわち、その育成を司る「教育」を主題とすることを暗示しよう。Coketown に学校を持つ父 Thomas Gradgrind の教育の “model” として育てられた Louisa が、町で最高の社会的地位を占める大実業家、Josiah Bounderby との結婚に至る小説の第一部は、父 Gradgrind の理想の教育が実現されてゆく過程でもある。“banker, merchant, manufacturer” (p. 58)<sup>2)</sup> として、生産、販売、利潤追求という工業都市のシステムを体現する Bounderby の人生は、浮浪児からのし上がり現在の高みに達した成り上がりのそれであり、自ら名のる Bounderby の名がいみじくも示すように、「進歩」を望む Coketown の理想を象徴して、上昇を求める Gradgrind の教育方針にもつながる。<sup>3)</sup> この Bounderby との結婚を約束され、父の理想のままに “practically formed by rule and line, from the cradle upwards” (p. 63) といわれる Louisa は、まさしく高みへと登る上昇の人生

を期待されている。Boulderby との結婚は、Louisa を Coketown 最高の地位に押し上げ、上昇すべく躰られた彼女の教育は、ここで完成を見るのである。

こうした「上昇」の理想を課せられた Louisa の Boulderby との結婚へ至る人生が、彼女の教育の「種蒔」であるとするれば、「刈入れ」にあたる Boulderby との結婚は、いかなる運命を彼女にもたらしたか。

Louisa が Boulderby の求婚を初めて聞かされるのは、Coketown に面する父の部屋である。

A window looked towards Coketown; and when she *sat down* near her father's table, she saw the *high* chimneys and the long tracts of smoke *looming* in the *heavy* distance *gloomily*. (p. 132)

これからその一員となる Coketown の町が Louisa の眼前に展開するこの個所は、ほんの一刷けのスケッチと見えながら、実は、作者の周到な用意が隠されている。Louisa の人生を「上昇」に導くべき町は、「聳え立つ」煙突や「大きく立ち現われる」煙で彼女を圧倒する。“heavy,” “gloomily” とある語も、彼女を押しひしぐ町の動きを伝えるだろう。しかも、この町の動きは、Louisa が腰を下ろし、その視点が下降することにより明らかになるのである。Louisa をともない階下に降りてきた夫から娘の婚約を聞いた Mrs. Gradgrind は、娘に向かって “there's something *running down* it [her shoulder] all day long” (p. 137) さらに、“As to the wedding, all I ask, Louisa, is — and I ask it with a fluttering in my chest, which actually extends to the *soles of my feet* — that it may take place soon.” (p. 138) と述べて、何物かが下降する感覚を訴えるが、それは、読者の心の中で Louisa へと結びつき、彼女の運命の下降を暗示する。

実際、テキストを少し読み返してみれば、あれほど娘として「上昇」の観念を植えつけられて育った Louisa であるのに、彼女の描写には「下降」のイメージが重ねられているのがわかる。たとえば、彼女は暖炉の火を眺めるのが習慣となっており、その姿は繰り返し描かれてゆく。彼女は、“the

bright sparks as they *dropped* upon the hearth” (p. 91) を見つめながら弟 Tom と語り, “the red sparks *dropping* out of the fire, and whitening and dying” (p. 94) に誘われてもの思いにふける。彼女の少女期は, “so much given to watching the bright ashes at twilight as they *fell into* the grate and became extinct” (p. 129) であった。その Louisa が見つめる火は、常に下方へ向かう動きを見せ、彼女に添う「下降」の感覚を強めてゆく。

Louisa の下降を予感させる運命は、London の紳士 James Harthouse の出現をまって、現実のものとなる。Bounderby のもとで味気ない生活を送る Louisa は、Harthouse の誘惑にのり、不倫の恋に落ちるのである。この過程は, “The figure *descended* the great stairs, steadily, steadily; always *verging*, like a weight in deep water, to the black gulf at the bottom.” (p. 230) という描写が示すように、Mrs. Sparsit が想像する “moral staircase” を Louisa が下降するイメージで語られる。さらに、Harthouse と駆け落ちの約束をした Louisa は, “heavy drops” (p. 235) となって降りしきる雨の中を父の家 Stone Lodge へ逃げ戻り, “If it [a sentiment] had ever been here, its ashes alone would save me from the void in which *my whole life sinks*.” (p. 239) と述べて、内にひそむ「下降」の意識を明らかにすると、彼女を支えようとする父の手を振りはらい、その足下に倒れ伏す。

このように、Louisa は、父の、そして Coketown の「上昇」、「進歩」の理想のもとに育てられ、成り上がりの権力者 Bounderby の妻となって運命が上昇し、理想を実現したかと見えるが、その実、彼女の人生は下降する。この下降する人生は、町の労働者 Stephen Blackpool の生を想起させる。Bounderby をはじめとする住人の「上昇」の犠牲となって辛苦を嘗めた拳句、the Old Hell Shaft と呼ばれる炭坑の堅穴に転落、命を失う彼の下降の人生は、Louisa の生の陰画であり、この小説の巧妙な構造を示すものである。

Louisa の人生の「上昇」と「下降」のずれは、彼女が担う「進歩」の理想の破綻を示している。Coketown は、もはや人々の「上昇」を可能にする「進歩」の町ではない。住民の「進歩」の夢を体現するかに見えた Bounderby の上昇の経歴が全くの偽りであることの露呈は、「進歩」の理想が幻滅へと化してしまった町、Coketown の実像を明らかにするのである。

## II

では、現実の Coketown はいかなる町なのか。Coketown の最初の描写は次のように始まる。

It was a town of machinery and tall chimneys, out of which *interminable* serpents of smoke trailed themselves *for ever and ever*, and *never* got uncoiled. It had a black canal in it, and a river that ran purple with ill-smelling dye, and vast piles of building full of windows where there was a rattling and trembling *all day long*, and where the piston of the steam-engine worked monotonously up and down, like the head of an elephant in a state of melancholy madness. (p. 65)

ここで特徴的なのは、筆者がイタリックで強調した語句が示す、町の運動のはてしなさである。とりわけ、工場の煙と蒸気機関のピストンの動きは、Coketown の象徴として以後も繰り返し描かれ、読者に印象づけられる。煙突から吐き出された煙は、円を描きつつ延々と続き、ピストンも一日中単調に同じ運動を繰り返して、二つながらに、町の永遠に反復される時間を示す。さらに、Coketown の川は、「悪臭放つ染料」で赤く染まり、流れをとめたかと見える<sup>4)</sup>「川」が「時の流れ」を象徴することを思えば<sup>5)</sup>この川の描写もまた、直線的な流れとしての進行を阻害された町の時間を表わすと理解できよう。Coketown を描くこの一節は「時間」のイメージに満ちている。

上の描写に続き、町の労働者の時間が、“every day was the same as yesterday and tomorrow, and every year the counterpart of the last

and the next” (p. 65) と語られる。つまり、Coketown において、時間は永久に同じ繰り返しとなり、何事も変化しない。確かに町は様々な運動に満ち、それは、はてしなく続いてゆく。しかし、その運動は、結局同じパターンを繰り返し、何も生み出しはしない。Coketown の時間は、閉ざされた世界の中を永遠に回帰する円環の時間なのである。

円環をなす Coketown の時間は、町の描写に「円環」のイメージが積み重ねられることから、読みとることができる。たとえば、上に引用した工場の煙の描写を見てみよう。“interminable,” “for ever and ever,” “never” の語句に形容され、「永遠」のイメージをともなうこの「煙の蛇」は、ウロボロス、すなわち「自らの尾を噛み円をなす蛇」を思い起こさせ、円環もしくは円環の時間と関わる<sup>6)</sup>。さらに、この「煙の蛇」自体、円運動を見せている。それは「とぐろを巻いて(coil)」煙突から出てゆくが、その「身をひきずる(trail themselves)」蛇は、空高く昇ってゆくのではなく、むしろ地へと降りてきて、円を描きながら同じ軌跡をめぐるのである。この煙の蛇の描写は、以後も繰り返され、町にまつわる円運動のイメージを強めてゆく。

町の運動のいまひとつの中心、蒸気機関のピストンの動きはどうか。この運動は、先に引用した一節に明らかなように“up and down”, つまり上下運動とされる。しかし、Coketown が織物工業の町であることを思えば、このピストンの垂直運動は、すぐさま、紡績の紡ぎ車、さらには力織機を動かすクランクの回転運動へと変化するのである。実際、工場の機械は、“turning spindles, rattling looms, and whirring wheels” (p. 267) と描かれ、その円運動が強調されている。

このように、Coketown は、あらゆる物が円運動を繰り返し、何物も変化しない円環の時間の世界である。「進歩」をもたらず理想の町たるべき Coketown は、実は「上昇」への意志が実現されることのない、古びた沈滞の町、*Bleak House* の London と同じ時間的様相を見せることになる。<sup>7)</sup>

Coketown で人生を送る Louisa とこの円環をなす町の時間とは、いかに関わっているのだろう。Louisa の少女期は、Coketown にある父の学校

と町はずれの家 Stone Lodge で過される。父 Gradgrind の教育方針が、Coketown のシステムに重なることは既に見たが、学校と町とを描くその筆致にも共通するものがある。たとえば、教室は“plain, bare, monotonous” (p. 47) と描かれるが、Coketown もまた、“wilderness of smoke and brick”であり、“direful uniformity” (p. 127) が支配する場である。いかなる変化も許さぬ町の単調さは、“life at Stone Lodge *went monotonously round like a piece of machinery*” (p. 96) といわれる Stone Lodge にも通じる。“round”の語は、Stone Lodge もまた Coketown と同じ円環の時間に支配されることを明らかにする。ここに用いられた“machinery”の語は、工業の町 Coketown のイメージを髣髴とさせるではないか。Louisa が暮らす Stone Lodge は、町の外に置かれてはいるが、Coketown と同じ時間構造を備えているのである。

先に見たように、Louisa の父 Gradgrind がめざしたのは、子供達を高めへ押し上げることであり、学校も Stone Lodge も、「上昇」をもたらす進歩の世界として設計された。しかし、彼の望みに反し、実際に作り出されたのは、進歩が不可能な円環の時間の世界である。彼の名 Gradgrind は、“grind”つまり碾臼の回転を連想させ、<sup>8)</sup> 彼が我にもあらず作り出した円環の時間の世界を寓している。

Stone Lodge と Gradgrind の学校で育てられた Louisa は、人生を円環の時間の世界で始める。父の教育を体現すべき人物として彼女は成長し、Coketown の権力者 Bounderby の妻となる。こうして Louisa の人生は上昇し、彼女は Coketown という円環の世界をその頂点にまで登りつめる。しかし、ここから彼女の運命は本人も気づかぬうちに下降し、Harthouse との不倫の恋により Bounderby 夫人の座から転落した彼女は、再び Stone Lodge へ戻ってくる。Louisa は、決して円環の時間の世界を出ることなく、底辺からその頂点にまで上昇し、紆余を経て再び人生の出発点に戻るのである。つまり、先に述べた Louisa の「上昇」と「下降」とは、Coketown に象徴される円環の世界のひとめぐりをなし、彼女はその世界の中を円を

描いて運動したことになる。上昇を望む Gradgrind の教育のモデルたるべき Louisa は、皮肉にも、円環の時間に支配された町、Coketown の円運動を示す雛型であった。

### III

円環をなす町の描写は、いまひとつの重要な円環の世界を想起させずにはおかない。Sissy Jupe が象徴する circus の世界である。circus は字義どおり、円形の舞台と結びつく円環の世界である。たとえば、circus の子 Sissy がその世界を説明する “when they can get any to break, they do break horses in the ring” (p. 49) という言葉にも示されるように、circus の舞台は “ring” さらに “circle” と繰り返し描かれ、そこが円環の世界であることが、読者に印象づけられる。

Norton 版の “Textual Notes” に、この circus を円環の場と定める作家の意図を示唆する興味深い一節がある。circus の団員 Childer が Gradgrind に “doing the canvass” と呼ばれる彼らの訓練を説明するくだりである。

Seeing Mr. Gradgrind at a loss, he explained very clearly by a *circular* motion of his hand that doing the canvass was synonymous with *riding round the ring*.<sup>9)</sup>

この箇所は、original manuscript とその corrected proofs には見られるが、*Household Words* に発表された際、本文から削除された。筆者がイタリックで示した語は、明らかに「円環」のイメージを伝え、circus が本来作家により円環の場と捉えられていたことを証する。作家がそれを意識的に削除したのは、それなくとも自らの意図を十分に伝えうると確信したからにはかなるまい。circus は、Dickens が意図的に「円環」と定めた寓意の世界なのである。

この circus と Louisa が捉えられている Coketown とは、共に円環の世界とされながら、鋭い対照を見せている。たとえば、“a triumph of fact” (p. 65) と称される Coketown が fact の町であるのに対し、circus は fancy



と imagination の世界である。町の教育を司る Gradgrind の学校の校長 M'Choakumchild の名が暗示するように、Coketown の住人は子供時代を奪われ、ひたすら大人になることを強いられるが、circus では、団員の Childer や Kidderminster という名が示すとおり、人々は成長の後も“childishness” (p. 77) を特質として備えている。

この二つの世界の対照は、それらを描く以下の文章を比較すれば、より明瞭になるだろう。circus の世界は次のように描かれる。

The father of one of the families was in the habit of balancing the father of another of the families on the top of a great pole; the father of a third family often made a pyramid of both those fathers, with Master Kidderminster for the apex, and himself for the base; all the fathers could dance upon rolling casks, stand upon bottles, catch knives and balls, twirl hand-basins, ride upon anything, jump over everything, and stick at nothing. (p. 77)

この円環の世界に特徴的なのは、人々の協調と調和である。彼らの動きは一見危うげに見えて、その実見事な均衡を保ち、何物にもとらわれぬそのしなやかさは、あらゆる物を受け入れ、なお安定する彼らの精神の柔軟性を示している。愛の神 Cupid の芸名を持つ Kidderminster を頂点に彼らが組み上げるピラミッドは、circus の人々が作り出す調和のとれた愛の世界の象徴である。

circus が自然な調和を保つ愛の世界であるとすれば、Coketown は醜い闘争と死に支配される世界であろう。

In the hardest working part of Coketown; in the innermost fortifications of that ugly citadel, where Nature was as strongly bricked out as killing airs and gases were bricked in; at the heart of the labyrinth of narrow courts upon courts, and close streets upon streets, which had come into some one man's purpose, and the whole an unnatural family, shouldering, and trampling, and pressing one another to death . . . (p. 102)

“fortification,” “citadel,” “killing” の語は、この町が戦いの場であることを印象づける。町の様相は住人の利己心を反映し、広場や通りは「無情な一家となり、お互いに押し合い圧し合いせめぎ合って死に至る」。ここには、人々が協力してひとつのピラミッドを作る circus の世界の調和はない。住人を死に導く「迷宮」、Coketown は、逃れる術のない悪しき円環の世界である。この町を取り巻く「煙の蛇」が、ウロボロスを連想させ、町の円環の時間を表わすことは既に見た。この「蛇」に、進歩をもたらす「知恵の木の実」へと人間を誘い、楽園の「無垢」から墮落せしめた聖書のイメージを読みとるならば、町を取り巻く煙の蛇は、“childishness” を保つ無垢の世界 circus と、「進歩」の夢に欺かれ墮落した悪しき Coketown との対立の構図をも示唆すると理解できよう。circus と Coketown は、同じく円環をなしながら、その正と負の両極を表わす対照的な世界となっている。

興味深いことに、この相対する二つの円環は、*Hard Times* のみならず、“On Strike” と題される当時の Dickens の文章にも見られるのである。1854年1月末、Lancashire の工業都市 Preston を訪れた Dickens がその経験をもとに筆を染め、同年2月11日、まさしく *Hard Times* 執筆の時期に *Household Words* に発表したこのスケッチ風の小品は、当時の作家の関心のありかを明らかにするだろう。

“On Strike” で注目すべきは、労働者の strike の場に同じ円環のイメージが重ねられることである。

These assemblages take place in a cockpit . . . . Arrived at the cockpit door, and expressing my desire to see and hear, I was handed through the crowd, down into the pit, and up again, until I found myself seated on the topmost circular bench, within one of the secretary's tables, and within three of the chairman. Behind the chairman was a great crown on the top of a pole, made of parti-coloured calico, and strongly suggestive of May-day.<sup>10)</sup>

底部に円形の pit を持ち、観客用ベンチが円形にそれを取り巻く cockpit

は、円形に並べられた観客席が円形の ring を取り巻く circus の舞台と、その形が似る。さらに、この cockpit には、色とりどりに飾られた五月柱が置かれ、労働者の祭りを表わす。ここに示された二つの要素、すなわち円形劇場と祭りとをひとつに結びつけるならば、circus のイメージを思い起こすのは、容易であろう。

Dickens は strikers を “the noble readiness in them to help one another ... could scarcely ever be plainer ... than in this cockpit”<sup>11)</sup>と描き、彼らを協調の精神により特徴づけるが、それは、先に見た circus の世界へと通じる。<sup>12)</sup> “On Strike” に描かれる労働者の日常生活は、*Hard Times* の Coketown と同じ碾臼でひかれる円運動のイメージを備えている。<sup>13)</sup> この悪しき円環の世界に対抗するのが cockpit の strikers の世界であり、それは *Hard Times* の circus の世界に重なるのである。こうして、同じ時期、同じ主題を扱う同じ作家の手になる二つの作品において、工業都市という悪しき円環の世界に対し、自然な調和を保つ circus に似たいまひとつの円環の世界が、共通して現われることになる。*Hard Times* における Coketown と circus、この対立する二つの円環は、当時、作家の精神の奥底を占めた観念の投影にほかならない。

Coketown の住人は、二つの世界の対立を鋭く意識し、circus を「よそ者」として町から締め出そうとする。その姿勢は、たとえば、教室で父が circus の一員だと明かす Sissy に、Gradgrind が “frowned, and waved off the objectionable calling with his hand” と嫌悪の情を示し、“You mustn’t tell us about the ring, here” (p. 49) と命じることからも明らかであろう。circus は、Coketown から排除されるべき世界であり、その除外により、町は平常の営みを続けるのである。

#### IV

Louisa の教育も、circus の世界を排除することに始まる。物語の最初、Louisa が読者の前に初めて姿を見せるのは、circus の場面である。弟 Tom

と壁穴から懸命に circus を覗くところを父に見つかり、家に連れ戻されるのである。“rule and line”により上昇するべく育てられている Louisa にとって、進歩の望まれぬ circus の円環の世界は、排除すべき危険な世界である。

けれども、用心深く隔てられながらも、Louisa と circus との間に、目に見えぬ結びつきがひそかに用意されていることを忘れてはならない。主人公を小説に初めて登場させる時、作家はその精力を最も傾け、細心の筆使いをするであろう。Louisa の小説への登場に circus の場が選ばれたことは、circus の世界が彼女の人生に及ぼすであろう影響の大きさを暗示する。実際、彼女は、circus の子 Sissy に共感と興味をよせる唯一の人物なのである。

Louisa と circus のつながりは、いつものとおり暖炉の火にじっと目を注ぐ彼女に弟 Tom が言う

Except that it is a fire ... it looks to me as stupid and blank as everything else looks. What do you see in it? Not a circus? (p. 93)

の言葉にも見てとれる。Louisa に特徴的に繰り返されるこの動作の彼女にとっての重みは、同じ火に何の意味も見出さぬ Tom との対照で強調される。しかも、Louisa のみに、その火の circus という読みが、投げかけられるのである。Louisa はそれを否定するが、Tom のこの言葉は、彼女自身も気づかぬ circus とのつながりを、はからずも告げている。物語の初め、Louisa は、Stone Lodge の悪しき円環の世界に暮らしながら、それと対照的ないまひとつの円環をなす circus の世界を、そのまなざしの対象として持つのである。

このように見てくれば、Bounderby との結婚が、Louisa の人生にいかにな大きな意味を持っていたかがわかるだろう。結婚を境に、Louisa は circus の子 Sissy に対し、“impassive, proud, and cold” (p. 138) と態度を一変し、彼女を遠ざけるようになるのである。しかも、Stone Lodge に Sissy

を残し、Coketownへ入ってゆく Louisa は、物理的にも精神的にも circus の世界から離れることになる。こうして Louisa は、かすかに保っていた circus の世界とのつながりを完全に断ち、Coketown という悪しき円環の世界の中心に入ってゆく。そして、彼女の人生は、この町の円環の時間に掬めとられ、それまでの上昇から下降へと至り、円を描いて再び人生の出発点へ戻るのである。

象徴的なことは、Louisa の物語が最初と同じく circus の場面で終ることである。Boulderby の銀行から金を盗んだ Tom は、罪が発覚し、Sleary の circus へ逃れる。Sissy と共に Tom を追ってきた Louisa は、喜劇のお仕着せに身をやつし演技する弟を求めて、再び壁穴から circus を覗く。場面は、物語の冒頭と重なる。小説の構造も、初めと終りが一致する円環構造をなし、Louisa の人生の円環を印象づけるのである。

ところで、ここで見逃してはならぬのは、小説の初めは見る側の人間であった Tom が演ずる者となり、かつて Louisa と Tom を circus から引き離した Gradgrind が、その ring の中で道化の椅子を占めることであろう。失踪した Sissy の父が道化であったことを思い起こせば、この Gradgrind の姿は Sissy の父と重なってゆく。さらに、Sissy と和解した Louisa も共にこの円に加わる。こうして、物語の最後に至り、Louisa も Gradgrind も、自ら排除した circus の世界に身をゆだねるのである。

「上昇」を求めて実は円環の時間に掬めとられた Louisa の人生は、Coketown に象徴される悪しき円環の世界の中を円を描いてめぐり、最初と同じ円環の世界に戻ってくる。しかし、その戻ってきた世界は、Coketown の悪循環の世界ではない。それは、同じく円環をなしながら、Coketown とは対照的に自然な調和を保つ circus の世界である。こうして、Coketown の悪しき円環から解放され circus へと移った Louisa の人生は、平面的な円を描くように見えて、実は一種の螺旋を描いていたのである。

物語は、昔のように暖炉を見つめる Louisa を描いて閉じられる。しかし、自らの上昇を信じて高慢であった彼女は、その人生の下降をも認識す

る “a gentler and a humbler face” (p. 312) を見せている。<sup>14)</sup> 彼女を取り巻く世界は、相変らず “lives of machinery and reality” (p. 313) に満ちている。が、その世界を “to beautify... with those imaginative graces and delights” (p. 313) という術を身につけた Louisa は、物語を通してひとつの精神成長を遂げたといえる。Louisa の人生が描く軌跡は、この成長の証しであり、これこそが、彼女が得た真の教育であった。

### 註

- 1) 作者が “the iron country” と呼ぶこの世界は、鉄工場長 Mr. Rouncewell の “In this busy times, when so many great undertakings are in progress, ... we are always on the flight.” (*Bleak House* (Harmondsworth: Penguin, 1978), p. 450) の言葉が示すように、沈滞の町 London に対立する「進歩 (progress)」の世界と描かれている。
- 2) テクストは、*Hard Times* (Harmondsworth: Penguin, 1979) を用いた。以下、本文からの引用は Penguin 版により、頁数のみを引用文の末尾に記す。引用文中のイタリックは筆者による。
- 3) Bounderby の名は、“bound” 「跳び上がる」の語に由来する。Cf. “Dickens’ Working Plans” in *Hard Times* in the Norton Critical Edition, ed. George Ford and Sylvere Monod (New York, 1966), p. 234.
- 4) この川は、別の個所で “black and thick with dye” (p. 146) と描かれ、その激んだ様が強調される。
- 5) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Co., 1974), p. 387. Dickens は、しばしば「川」を「時の流れ」のイメージで描いている。Cf. *Little Dorrit* (Harmondsworth: Penguin, 1973), p. 387: “... the flowers... floated away upon the river; and thus do greater things that once were in our breasts, and near our hearts, flow from us to the eternal seas.”
- 6) Ad de Vries, *Dictionary*, p. 411.
- 7) 拙論「『荒涼館』における時間構造」*The Edgewood Review*, VIII (1981), pp. 57-74 参照。
- 8) 小説の表題に考えられた “Mr. Gradgrind’s grindstone” は、その名が、“grind” の語に由来することを証する。“Dickens’ Working Plans” in *Hard Times* (Norton Edition), p. 232.
- 9) “Textual Notes” in *Hard Times* (Norton Edition), p. 246.

- 10) Charles Dickens, "On Strike" rep. in *Hard Times* (Norton Edition), p. 294.
- 11) *Ibid.*, p. 296.
- 12) *Hard Times* にも strikers は描かれるが、仲間の Stephen を犠牲にする彼らに協調の精神は見られない。"On Strike" の strikers の好ましい特質は、*Hard Times* では circus の世界に与えられたようである。
- 13) 労働者の日常生活は、"they had a little grinding ; one way and another, already" ("On Strike" in *Hard Times* (Norton Edition), p. 287) と描かれる。
- 14) このように見てくれば、*Hard Times* が前作 *Bleak House* と数々の共通点を持つことは明らかであろう。Louisa の人生の軌跡は、*Bleak House* の二人の女性達、Lady Dedlock と Esther Summerson とを思い起こさせる。拙論、「*Bleak House* の空間—Lady Dedlock を中心として—」 *Osaka Literary Review*, XXI (1982), pp. 62-74 参照。